

出版稲門会 会報

●巻頭言：巣ごもり後の危機 出版界挙げ行動を 安部順一(1頁)
 ●寄稿：石原史/星真一/青木康晋/宮路敬久/田中幹弘(2-3頁)
 ●学而時習之：圖師尚幸(4頁)

●発行 出版稲門会 〒110-0016 東京都台東区台東2-24-10
 (株)新星出版社内 電話 03-3831-0743
 ●発行人：筑紫恒男 ●編集人：富永靖弘
 ●017号 2022年10月1日発行 題字：服部敏幸

現在の混沌世界を、石橋湛山はどう語るだろうか

圖師尚幸

この夏、東京・大阪・千葉で講演機会を持つ。ロシアの侵略戦争が勃発するなか与えられた演題は「絵本は戦争をどう描いているか」。

ややこしい争いの背景を論述する図書に比べ、絵本は先の大戦の実相を正直に伝える。大谷張りの4シームで素朴に「戦争はだめ。戦争しない」とずばりと語る。

国連憲章や日本国憲法を下敷きに挟みながらの拙い話しかできないが、絵本なんか日常手にしない大人たちが案外真剣に聞く。

事前準備に専門書を漁り読むなかで、『石橋湛山評論集』(松尾尊亮編、岩波文庫)が老いた脳みそを働かせてくれる。湛山は大先輩の校友だ(明40文)。「東洋経済新報」にあった自由闊達な文筆を縦横に揮った賢人であることとはた

でも知る思想家であり、誠実無比の保守政治家だった。

湛山、曰く。「言葉を飾るな素直に語れ」「進んで批判を求めよ」(1944)と政治家を誡め、敗戦直後には今後の日本は世界平和の戦士としてその全力を尽さねばならぬ(1945)と檄をこぼす。

さらに「自衛力を強化しなければならぬ」というのは、戦前の軍備拡張論と同じ危険な考え方だ。国力を消耗するよくな考えでいつたら、国を亡ぼす。そういう考え方をもった政治家に政治を託するわけにはいかない(1968)と箴言を残した。

終生ぶれなかつた湛山の思想と哲学。

どんどん劣化する政治世界の現実を前に、ウーンと唸るばかりではないか。

元六福社ほる出版社長・昭43迄

早稲田界限

▼コロナ・パンデミックは3年を経過、まだまだ続く。感染者は第6波をはるかに超え死者も増大する。しかし、政府は経済活動に軸を移してコロナ対策にはほとんど策なし。かくして人びとは東に西にと移動する。もちろん夜の盛り場には酔客がわんさとたむろする。

▼馬場の駅前広場で繰り広げられた若者たちの傍聴感な路上飲みはどうなったか。多くが早大生だったと報じられ大学も苦慮したらしい。聴く耳もたない年頃だ。フェンスで広場を囲まれてもかまわず缶ビール抱えて侵入する。これ、新しい馬場の文化になるや否や。

▼聴く耳自慢の岸田文雄首相(昭57)

注ぐ、どうやらこの聴き耳は都合耳。国民の声には聞き流しの術でその場をしのご。内輪の強者の声にだけ都合耳をしつかり利かす付度差。些か困惑気味の松野博一官房長官(昭和61法)。愚直さは伝わるが個性を見せず。阿氏とも校友だ。

▼旧統一教会の政界汚染。まるで政界ジャックではないか。母校校友の議員たちも政界劣化に染まりに染まる。首相に官房長官ふたりが関わらないようで胸なでおろす自分が情けない。今ロシアのウクライナ侵略など世界が激しく動く。大丈夫だろうか、わが日本？

▼大隈重信・石橋湛山(明40文)ら母校先輩の賢人たちは今世をどう読み解くだろうか。その言葉を聴いてみたい。

(圖師尚幸)

編集雑誌記

▼80歳の壁」が話題である。壁を突破するには栄養バランスの取れた食生活と心がけ、適度な運動が必要。ルーティンワークも大切のようだ。同居する養母は大正15年生まれの96歳。壁はとうに壊している。つくづく壁は自分自身が作っているのではないかと思う。原稿をお寄せいただいた方々に感謝。

(北口克彦・昭56改修)

▼最近、デジタル特典付きの出版物が出てきていますが、交友会費、寄付金に電子書籍のようなデジタル特典をつけてはいかがでしょうか。稲門会への参加や母校への寄付のついで、愛校心の満足とともに、ちょっとした読書もできて会員の皆さんにも喜んでいただけたらいいです。

(松尾里央・平8改修)

▼初めて足を運んだのは学生の時。授業の課題で「木靴の樹」を観に行きました。3時間を越す作品で、当時はまだ若いから体力があったのかもしれないが、今なら寝落ちしそう。岩波ホールの開館は、ちょっと寂しい、今年の出来事です。

(志本淳一・昭57一文)

▼平成16年から事務局、17年から幹事を担当してきましたが、今年幹事長を卒業し、会報の編集長を拝命しました。創刊号から関わってはいったものの、いざ担当になると段取りやノウハウがわからず、皆様の温かい協力のおかげで発行。ありがたうございました。事務局は引き続き担当致します。

(富永靖弘・昭59年)

新聞記者出身の新参者が、いきなり出版稲門会会報に原稿を書けと言われ躊躇しましたが、外から見える風景もあるかもしれないと思い、お引き受けしました。皆様、初めまして。よろしくお願ひ致します。

出版界との出会いは8年前。経済担当の編集委員でしたが、雑誌『中央公論』編集長を命じられ着任。しばらくは驚きの連続でした。中でも編集者が「生産者」であり、作った書籍や雑誌がどれくらい売れるかが常に問われるというのは、衝撃でした。新聞記者は自分をジャーナリストとは思っていても、「生産者」という感覚はあまりありませんから。

その後、新聞社で広告を担当し、出版社の皆様には広告主としてお世話になりましたので、6年ぶりの復帰とはいえ、出版界とのかかわりは続いてきたことになりました。

さて、その出版界です。コロナ禍に見舞われたこの2年、紙と電子を合わせた出版市場はプラスで推移し、昨年は紙の書籍の売上が15年ぶり

に増加したとあって、「やはり本は求められている」と意気込んで復帰した早々、あちらこちらで聞こえてきたのは、「書店から人が消えた」という嘆きでした。

これをどう乗り越えるか。個社の取り組みはもちろん重要ですが、出版社、販売会社、書店をひっきりぬめた出版界全体での取り組みが、今こそ必要です。出版界が一丸となった「秋の読書推進月間」が10月末からスタートします。それにとどまらず、文字・活字

巣ごもり後の危機 出版界挙げ行動を



安部順一

置が3月下旬で終了し、リバウンド警戒期間の行動制限もおおむね4月末でかからなくなつた時期と一致します。「巣ごもり」から解放され、これまで書籍や雑誌に使っていたお金や時間を旅行やレジャーに振り向ける。そんな悪夢の

文化を守るため、政府に働きかけることもあつていい。

言うまでもなく、最大の懸念は書店の減少です。6月には東京・赤坂から書店がなくなる話が話題になりました。「書店が減る」↓「新刊を置くスペースが減る」↓「初版部数が減る」。その結果、

出版業界全体の売上(規模)が縮小し続けるという悪循環を断ち切らなければなりません。書店の経営が成り立つにはどうすべきか、新規参入や新規出店を促す支援策も含めて、出版界全体で考えましよう。

ものづくりの面からみると、紙の書籍や雑誌は特殊な商品です。どの本がいつ、どこで、何部売れたのかはわかりません。しかし、読者の姿がなかなか見えてこない。電化製品なら、保証のためユーザー登録を求められることで顧客名簿がでますが、それが紙の本にはないのです。その意味でも、読者と直接対面している書店は貴重です。書店員の皆様の肌感覚を取り込み、本づくりに生かしていきたいと考えています。

これまで、なんとなく早稲田出身は群れるべきではないと思ってきましたが、出版界はそうも言っていないかもしれません。出版稲門会の皆様とお会いし、出版の未来を語り合える日を楽しみにしております。

(中央公論新社社長・昭60改修)



最近、思うこと

石原 実

大学に在学中、就職シーズンを迎え、「世の中のお役に立つ」仕事をしたいと思い、出版業界を志しました。当時の出版社は今より遙かに狭き門で、めでたく就職するのが難しかったように記憶しています。卒業したのが1980年でしたので、以来40数年にわたって業界に従事してきました。いろいろと紆余曲折もありましたが、自分が志した仕事を続けてこられた訳ですから、幸せだったと思います。



あえて使い続ける選択を

星 真一

私はキャリアのほとんどを営業部門で過ごしてきましたが、私が若かった頃は「習うより慣れる」で新人研修で教わったのは「常備」と「3延べ」くらいで、見様見真似で書店の販促に出かけたものでした。今は当時と比べるとあまりに難問が山積しています。売上の低迷に歯止めがかからず、出版社や書店の廃業が絶ちません。

大学に在学中、就職シーズンを迎え、「世の中のお役に立つ」仕事をしたいと思い、出版業界を志しました。当時の出版社は今より遙かに狭き門で、めでたく就職するのが難しかったように記憶しています。卒業したのが1980年でしたので、以来40数年にわたって業界に従事してきました。いろいろと紆余曲折もありましたが、自分が志した仕事を続けてこられた訳ですから、幸せだったと思います。

昨年9月に長らく暮らした大阪を離れ、学部を卒業して以来28年ぶりに東京に戻りました。ただいま改装工事中の紀伊國屋書店新宿本店で勤務しております。

お披露目することができました。お客様だけでなく、著者様も出版社の皆様も、これまで以上に多くの人が集い、出版業界に元氣と勇氣をもたらす店舗に生まれ変わるため、目下は3階のリニューアル工事を進めております。



人生の帳尻は合ったのか

青木康晋

出版の仕事をしていると、作家さんやライターさんに、早稲田OB、OGが多いことは、みなさん、経験的にご存じでしょう。とくに第一文学部(現文学部)、第二文学部(現文化構想学部)、教育学部の出身者が多い気がします。

なったものを捨てるのは簡単なことですが、当社はあえて使い続けることを選択しました。使い続けるためには修繕が必要ですし、新しい時代に適応するための改修も必要です。変化しないかぎり継続することはできません。時代にふさわしい文化の発信拠点として紀伊國屋ビルを再生させ、そこで本を商い続けて歴史あるビルを次の世代へと手渡していくことが、出版と文化への貢献に他ならないと考えています。

出版の仕事をしていると、作家さんやライターさんに、早稲田OB、OGが多いことは、みなさん、経験的にご存じでしょう。とくに第一文学部(現文学部)、第二文学部(現文化構想学部)、教育学部の出身者が多い気がします。

国際大学になっていて、2004年には国際教養学部も開設されている。その頃から、早稲田界隈では海外スイーツを取り入れたお洒落カフェが増えた。中でも、2021年10月にオープンした早稲田大学国際文学館(村上春樹ライブラリー)内に同時開業した「橙子猫」が特にお薦めのカフェ。現役の女子学生2名が経営全般を担っている。さらに、その「橙子猫」の運営サポートをしているのが、西早稲田交差点近くの喫茶店「Foncatel」を営んでいる平井幸奈さん。オーストラリアでのレストラン修行を生かして、在学中の2013年に開業、現在では原宿や渋谷などで複数店舗を展開、事業拡大中。



妙に浮かれた80年代

宮路敬久

1980年代に入り、時代の空気は大きく変わった。高度経済成長期だったが、政治の季節でもあった激動の60年代。オイルショックがきて成長が終わり、あっとい間に暗い時代になった70年代。それが80年代に入ると、妙に浮かれた空気になった。

そんな1980年に大学に入学。すぐにやってきた夏に流行ったのは松田聖子「青い珊瑚礁」。キャンパスにはデニスカットを持ち、ブランド物のデニスウェアを着た人が急激に増えていった。田中康夫「なんとなく、クリスタル」がベストセラーに。酒を覚え、キャンパス



早稲田界隈の咖啡店事情

田仲幹弘

自分の珈琲好きはいつからだろうか。ブラックコーヒーの味を覚えたのは、大学入学してからで、南門通りの「ぢらんたん」で一日何杯も飲みながら読書に没頭していた頃からだと思いついていいた頃からだと思いついていいた。バブルは崩壊し、長い

年、2022年の3世代のマップを見比べると、在学中にあった咖啡店は形を変えた「ぢらんたん」と早稲田松竹の通り向かいの「エスペラント」くらいしか現存していない。小売店の変遷の速さを感じるし、書店、古書店も同様だよねと出版業界の現状に思いを馳せる。

これからは「女性」「海外」の時代だよなあ、と思いを巡らし、今日も珈琲を飲んでいきます。(トーン副社長・昭56政経)



なりたいたい、芥川賞や直木賞を取るぞ、という大それた野望を抱いたからです。

しかし、政経に行つて、人生が変わりました。卒業後、新聞社に入り、本当は出版局希望でしたが聞き入れられず、文学とはほど遠い政治部記者になりました。夢がかなって週刊朝日の編集長になったときは、入社から23年もたっていました。

し、私にお鉢が回ってきました。それから社長を8年半、会長を1年の計10年近くも、出版社の経営をするとは思っていませんでした。でも、出版の仕事をやれて、本当によかった。社長在任中、朝日史上初の芥川賞作品(今村夏子さんの「むらさきのスカート」の女)を出すこともできました。7月から学研プラスに移り、大好きな出版にかかわり続けています。

にいる時間よりも居酒屋にいる時間の方が長かった学生生活。大学を卒業して日販に入社したのは1984年。巷では「チェッカーズ」涙のリンクエスト」が流れていた。あの頃は出版業界も会社もまたまた右肩上がり。雑誌がよく売れた。給料は全て酒代に消えていった。

引くデフレ。出版業界も苦境にあえいできた。そして2020年代。また、確実に時代の空気が変わっている。コロナ禍、そしてデジタル化の急速な進展。インフレの足音も高くなってきた。生活様式は大きく変わる。もう、あの浮かれた80年代の空気に戻ることはない。

今年に入つて還暦を迎え、会社を離れ家族に早稲田カントリークラブのクラブハウスを買った。料理と読書を楽しまず、慎ましく生きていこうと考えている。

(取材) 学研プラス顧問・昭56政経